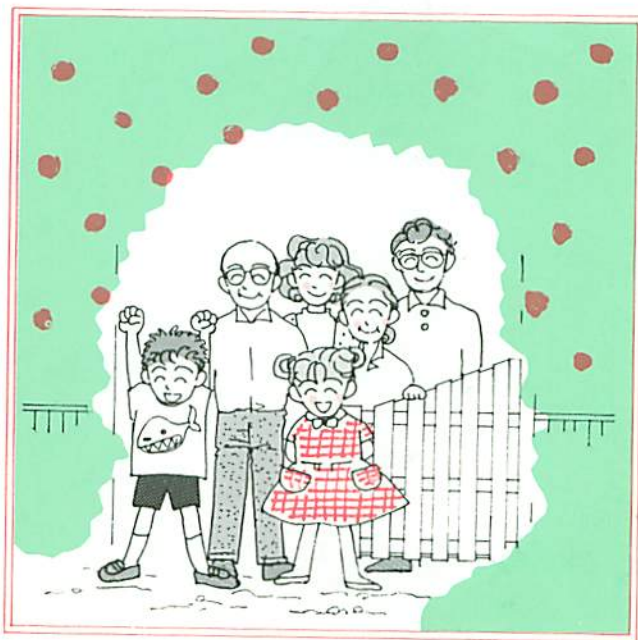


老年期における健康と生活

プロジェクト研究
高齢者の健康と生活に関する縦断的・比較文化的研究
第3回全国調査の結果



(財) 東京都老人総合研究所

ごあいさつ

皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、私ども東京都老人総合研究所は米国ミシガン大学の老年学研究所と共同して、全国の高齢者を対象といたしました第1回調査を1987年に実施し、1990年に第2回、1993年に第3回調査を実施してまいりました。この間、調査の対象となられた高齢者の皆様の多大なご協力により、今後の保健・福祉政策に役立てるための貴重なデータを収集することができました。まことにありがとうございます。

この度、これまでの調査の結果を簡単に取りまとめましたので、お送りいたします。

今後とも、私どもの調査にご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成7年4月

(財) 東京都老人総合研究所 副所長

高齢者の健康と生活に関する縦断的・比較文化的研究

統括リーダー 柴田 博

この報告書では、次の2点を中心に結果を紹介します。1つは、日本の高齢者の健康と生活は、米国の高齢者と同じなのか、違うのかを示すことです。2つめは、3回にわたる全国調査に基づき、6年の間に高齢者の健康や生活がどのように変化したのかを示すことです。

日本と米国の違い

1. 身体面の健康は日本の高齢者の方が良好

ここでは、まず、1987年に行われた第1回全国調査にご協力いただいた2,200人の高齢者の皆さんと、米国で60歳以上の高齢者を対象に1986年に実施された調査の協力者1,669人のデータを比較した結果を示します。

高血圧や心臓病、糖尿病などの6種類の慢性疾患のうち、いずれか1つでももっている人の割合を図1に示しました。慢性疾患をもっている人の割合は、日本では男性40%、女性48%、米国では男性73%、女性83%でした。入浴、歩行、力のいる仕事など日常の生活動作に支障がある人の割合は、図2に示しましたように、日本では男性9%、女性11%であるのに対し、米国ではそれぞれ37%、49%と4倍の違いがありました。日本の高齢者は、米国の高齢者と比べると、慢性疾患をわずらったり、日常生活に支障をもち、周囲の人のお世話になっている人の割合は低く、身体面での健康は良好な状態にあるようです。

2. 精神面の健康は日本も米国も同じ程度

ゆううつになるとか、よく眠れないなど、うつ的な精神状態をどの程度もっているかをみてみました。点数が大きくなるほどうつ的な精神状態が多いことを意味していますが、図3に示しましたように、男女とも日米でほとんど差はみられません。

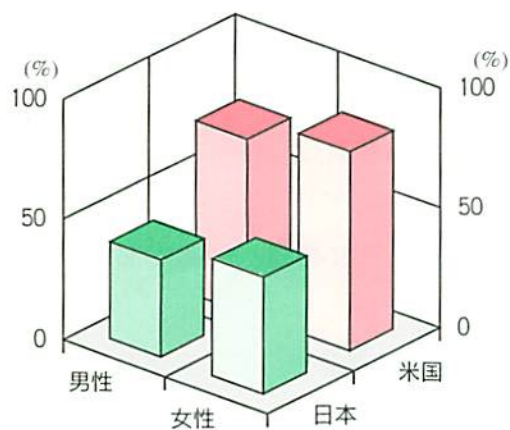


図1 慢性疾患を有する人の割合

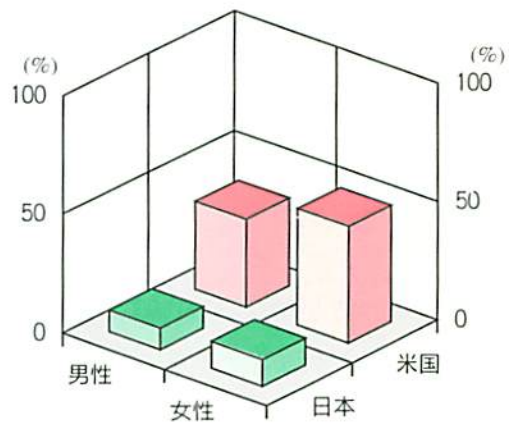


図2 日常生活動作能力に支障のある人の割合

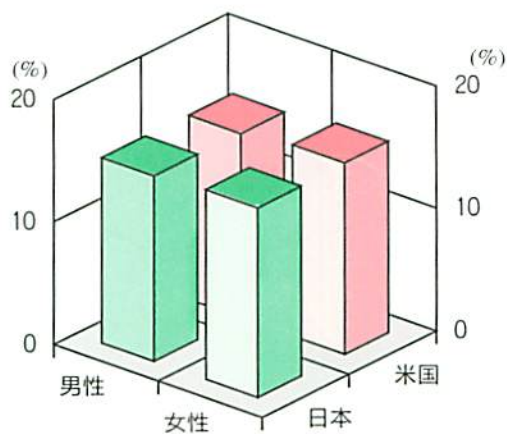


図3 抑うつ的な精神状態の得点

3. 日本の高齢者は人づきあいが少ない

図4には、友だちや知り合いと会う回数を日本と米国で比較した結果を示しました。友だちや知り合いと会う回数が月1回以上という人の割合は、日本では男女それぞれ60%と67%でしたが、米国ではそれぞれ81%と86%でした。つぎに、地域の団体やクラブ・サークルにどれくらい参加しているかをみてみました。図5に示されているように、月に1回以上参加しているという人の割合は、日本では男女それぞれ38%と34%でしたが、米国では48%と52%であり、男女とも米国の方がかなり高い値を示しています。

以上をまとめますと、日本の高齢者は米国の高齢者と比べて、身体面の健康では良好な状態にあるものの、人づきあいは少なく、社会的な活動に参加している割合が低いことがわかります。しかし、人とのふれあいが少ないにもかかわらず、精神面での健康が米国の高齢者と比較しても低くありませんでした。これは、人とのふれ合いが少なくなっても、それを静かに受け入れる、つまり、「老いたら身をひく」という日本的な価値観が反映している結果とみることもできますが、興味深い結果です。

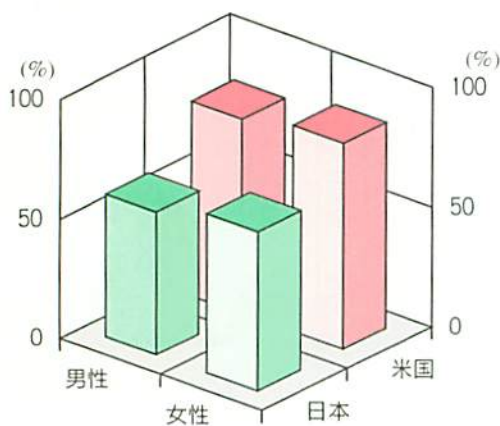


図4 友だちや知り合いと会う回数が月1回以上の人割合

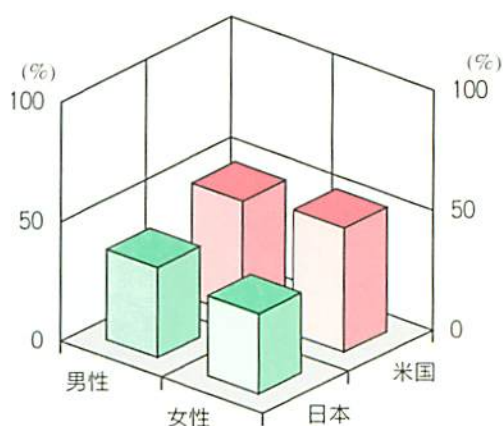


図5 社会参加の頻度が月1回以上の人の割合

6年間の変化

1. 歳をとるに伴って身体的な健康は衰える

この章では、第1回、第2回、第3回のすべての全国調査に協力していただいた1,369人の高齢者の方々の結果を示します。

図6は、高血圧や心臓病などの4種類の慢性疾患のうち、いずれかひとつでもかかっている疾患がある人の割合を、調査ごとに示したものです。第1回の調査では、慢性疾患にかかっている人の割合が36%、3年後の第2回調査では41%、6年後の第3回調査では45%と、6年間の間に慢性疾患をもっている人の割合が徐々に増加しています。

入浴や歩行、階段の昇り降りといった日常の動作に支障があるかないかをみてみますと、図7に示しましたように、第1回調査では困難があるという人が7%、第2回調査でも7%でしたが、第3回調査では18%と第1回調査の2倍以上に増えています。

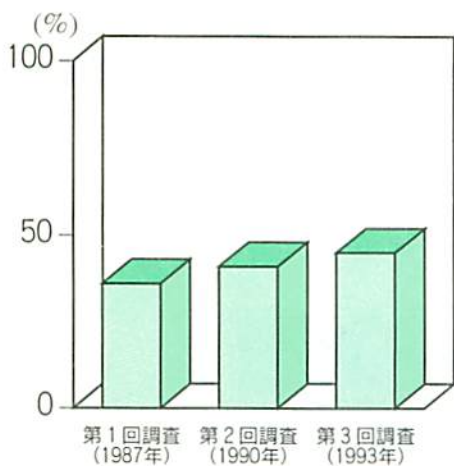


図6 慢性疾患を有する人の割合の変化

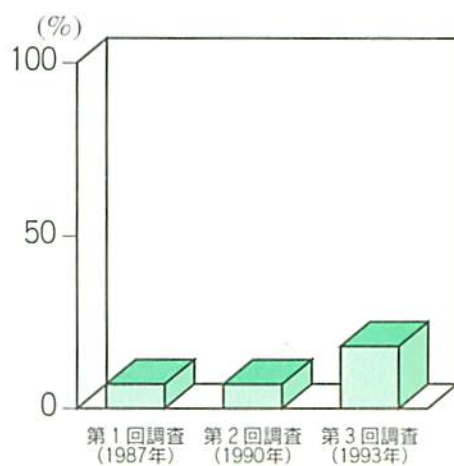


図7 日常生活動作能力に支障のある人の割合の変化

2. 生きがい感や生活のハリは衰えない

このように、慢性疾患をもち、また日常生活に障害をもつ人の割合も増えるなど、身体面での健康は歳をとるにしたがって衰えてきますが、生きがい感とか、生活のハリのような精神面での健康も、同じように歳をとるともなつて落ち込むのでしょうか。生きがいや生活のハリを測る質問の回答から、その変化をみてみました。図8は、数字が大きくなるほど、生きがいや生活のハリがあることを示していますが、第1回から第3回までの6年間では、大きな変化がみられないことがわかります。

3. 人づきあいも保っている

では、友だちや知りあいを訪問したり、地域の団体やクラブ・サークルにどの程度の人が参加しているのでしょうか。図9に示したように、友だちや知り合いを訪問する回数が1ヶ月に1回以上と回答した人は、第1回調査では65%、第2回調査では72%、第3回調査では69%でした。地域の団体やクラブ、サークルに月1回以上の回数で参加している人の割合は、第1回調査では39%、第2回調査では39%、第3回調査では41%でした（図10）。

歳をとるに伴って身体面での健康は衰えていきますが、社会との関わりやふれ合いは維持され、生きがいも低下しないことがわかりました。全体としてみれば、身体面での老化があつたとしても、日本の高齢者は、精神活動を維持し、社会的な役割も担っているようです。



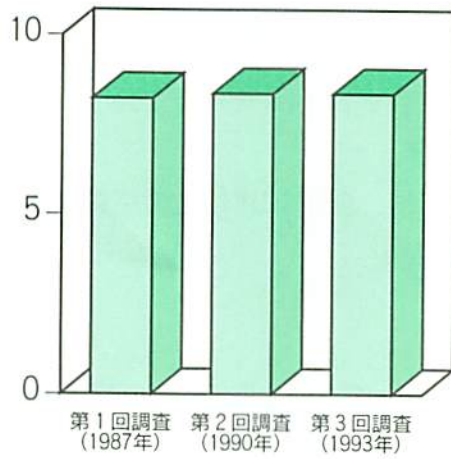


図8 主観的な幸福感の得点の変化

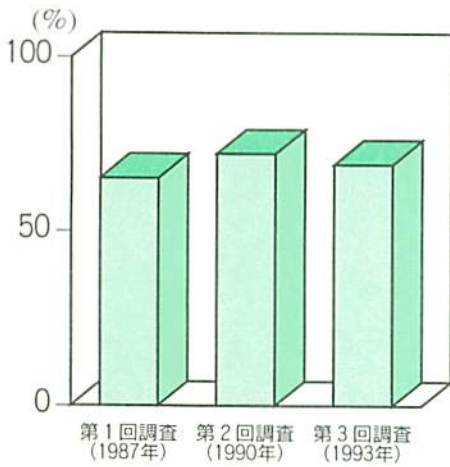


図9 友だちや知り合いと会う回数が月1回以上の人の割合の変化

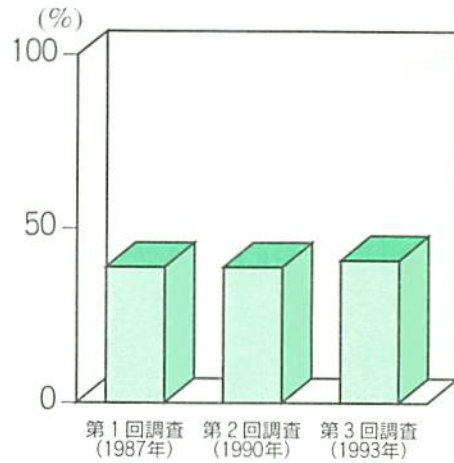


図10 社会参加の回数が月1回以上の人の割合の変化

調査方法の概要と研究組織

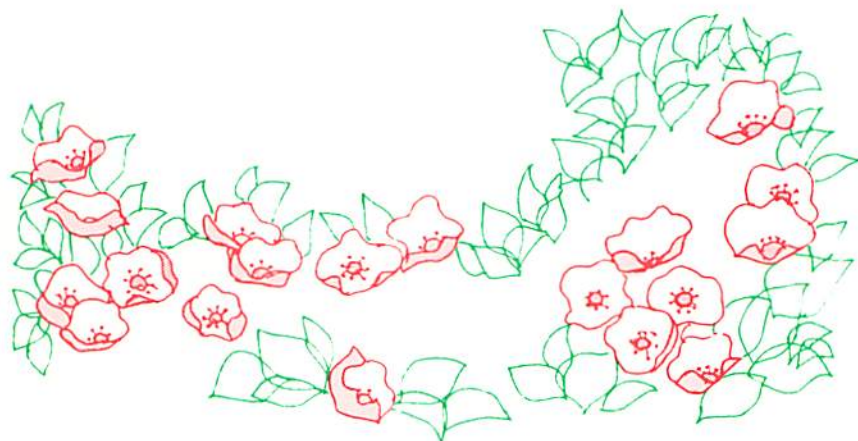
1. 調査方法

第1回全国調査は1987年、全国60歳以上の高齢者から無作為に抽出された3,288人を対象に、訪問面接法によって実施された。調査完了数は2,200であった。

第2回全国調査は1990年、第1回全国調査の完了者2,200人を対象に訪問面接法によって実施された。調査完了数は1,671であった。

第3回全国調査は1993年、第2回全国調査の完了者1,671を対象に訪問面接法によって実施され、調査完了者数は1,369であった。

第2回全国調査時から、対象者本人が調査に応じられない場合に代行調査を実施しているが、調査完了数には含めていない。また、第2回全国調査時に、新規の調査対象者580人を加え、第3回全国調査時には、第1回、第2回の全国調査で調査不能であった対象者に対する再調査を実施した。



2. 研究組織

統括リーダー	副所長・保健社会学部門（兼務）	柴田 博
研究スタッフ	精神医学部門	本間 昭
	保健社会学部門	杉澤 秀博
	社会福祉部門	中谷 陽明
	精神医学部門	矢富 直美
	保健社会学部門	高梨 薫
	プロジェクト研究員	深谷 太郎
	所外研究スタッフ	上智大学
東洋大学		園田 恭一
東京学芸大学		野口 裕二
つくば国際大学		横山 博子
東京女子医科大学看護短期大学		久田 満
国立精神・神経センター精神保健研究所		杉澤 あつ子
NHK放送文化研究所		小野寺 典子
中央調査社		西村 昌記
米国側研究代表者	ミシガン大学老年学研究所	Jersey Liang

平成7年4月15日発行

7登録第1号

編集 (財) 東京都老人総合研究所

「高齢者の健康と生活に関する縦断的・比較文化的研究」プロジェクト

発行 (財) 東京都老人総合研究所

〒173 東京都板橋区栄町35-2
